

和紙 だより

目次

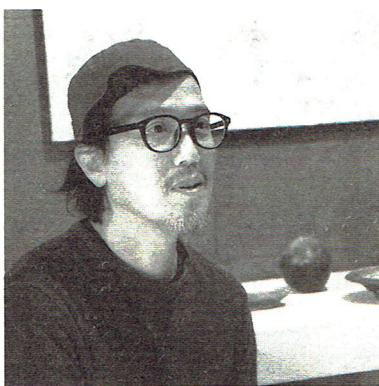
和紙な人々 ハタノワタルさん
レポート 「越前和紙の未来を考える」開催
取組紹介 越前和紙ブランド戦略策定
情報欄

4 3 2 1 頁

和紙な人々

■ハタノワタル(畑野 渡)

「紙漉キ ハタノ」主宰。1971年、淡路島生まれ。1995年、多摩美術大学絵画科油画専攻卒。1997年、黒谷和紙研修後独立。以後10年間、黒谷和紙協同組合で働く傍ら、独自の和紙作品・空間を制作、全国各地で展示会を開催。2018年、京都府綾部市の築百年の古民家を改築し、紙漉き工房兼和紙の実験的自宅を開設。和紙制作だけでなく、和紙素材の生活実用品から家具、内装デザイン・施工、書・絵など、建築・工芸・アートを横断する制作活動を行っている。京都伝統工芸大学校和紙工芸専攻講師。京もの認定工芸士。



■ハタノワタルさん

(紙漉き職人・和紙作家)

「生活基底材としての和紙を普通につなげたい」

●紙を使う側のプロ

コロナの影響はいい方にあり、一・五倍くらい売り上げが伸びています。建築士さんと組んでやる仕事は昔からコンスタントにやっています。ですが、三年くらい前からかなり伸びてきて、今では売上の七割が建築・インテリア系です。紙漉きを始めてから二四年目になります。最初は和紙の使い方なんて全く知りませんが、

最初は和紙の作り方は習得しても、最終使用目的がイメージできてないから、物の組み立て方が逆で、使い方を紹介できない。だから僕は紙を漉きながら、紙を使う側のプロになろうと思いました。ここに使うのだったらどんな和紙でなければならぬか、最終目的から仕様やデザインを考えます。私の家はそういう実験和紙であふれています。例えば、風呂場や脱衣場の床・壁、風呂場窓の障子も和紙です。台所やリビングの床・壁・天井、テーブルも和紙、ランチョンマットやコースター、皿なども和紙で作ってみました(笑)。水気や火気など、実際の使用に耐えるように、ガラス塗料、ウレタン油などを適材適所でコーティングし、和紙の風合いがどのくらい保てるか、経年変化の様子も検証しています。不燃加工をしてもらった和紙



自宅風呂場の窓、床・天井もガラスコーティング和紙

は高くなりますが、建築基準法の不燃認定も取れるので、ホテルやマンションなどのビルでも使用できます。

●ズバツと届くところ

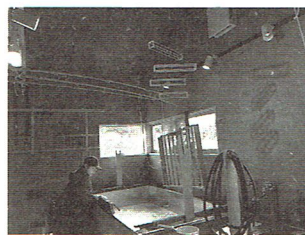
に伝える

最初の頃、売り込みに苦勞しました。最低でも月一回は、展覧会・展示会をやつて、こんな作家がいる、新しい動きがあるぞ、というのを常に見せ、名前を覚えてもらうことが必須です。いわば宣伝費です。

作風や名前を覚えてもらったら、少しずつ問い合わせがきます。建築士やインテリアデザイナー、又、自分と趣味が合うと感じてくださる僕のファンです。例えば、誰を指名していいかわからないが、内装を和紙でやってほしいと考えるお客さんが、たまたま一人からハタノという名前を聞いても、本当にこの人ではないのかと不安になります。周りの二、三人からハタノの名前を聞けば確信を持ちます。そして建築士さんにも「ハタノさんにやっていただけたら建築士さんにも「ハタノさん」

けるのだつたらお願いします」となる訳です。マーケティング的な物作りを僕は全然やっていません。一般的には、今の売れ筋やインバウンド需要を考え、購買層ピラミッドの各層に向けた商品作りをやつて、より多く売ろうします。和紙も多く売ろうとすると価格帯を下げ、

床暖房シャワー室設置の紙漉き場と紙加工スタッフは5人。工房は全部で3棟。

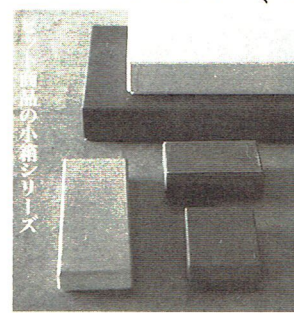


安くするためにいろいろな材料を入れて作り、その上売れ残る物も多くあります。

僕のところは規模も小さいし、全ての層を相手にするのは無理ですから、基本的に同世代の人たちに向けた物作りをやっています。百人のうち一人が僕の作るものを好きだとしたら、千人だと十人、一万人に知らせたら百人。そのくらいの人数だったら、大切に付き合えるし、説明も提案も丁寧にできます。また平米単価を特になげなくても、年齢と共に一人当たりの購買単価が高くなっていて、育つていく。目指す客をセンスの良し悪し、お金があるなしで捉えるのではなく、要は、自分の作品を誰に届けたいかをしつかり見極め、そこにピンポイントで近づく方が、無駄なく、効率よく、過大な在庫も抱えなくていい。SNSなどでそれが可能な時代です。

●普通につなぐ生活基底材

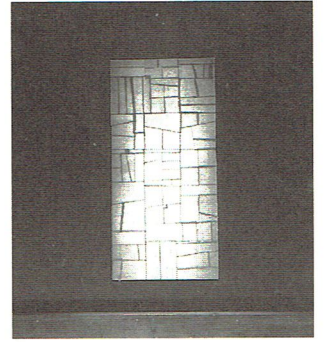
二五年くらい前に韓国を訪れた時、いろんな所に韓紙が使われていて、すごく素敵だなあと思いました。家具や建具、障子、看板などにも普通に使われているし、そこかしこに伝統の香りがして羨ましかった。農業、大工、左官なども昔は地域で成り立っていた。彼らは伝統が好きで伝統を繋げるために仕事をしてきたのではなく、身の回りにあるものを守つてつなげてきただけ。それさえ普通に残していけたら人は暮らしていけるのでは?と思いました。



紙漉き機

今まで和紙がイヤだという人に、僕は会ったことがありません。

大阪蕎麦屋「守破離」内装(2018年)



和紙はそういう稀有な素材です。僕が目指す和紙は、昔から愛され使われ続け、普通に続いてきた生活基底材としての和紙です。ヴィジュアルだけで制作された和紙は装飾的で派手になり、それはそれで素晴らしいですが、デザイン勝負だけになります。僕の強いテーマは、絶対人にイヤと言わせない和紙をうまく現代の暮らしの中に取り込み、その素材の安定使用を続けることです。昔は職人もその意味で提案力があり、商売も回っていたと思います。最近はその作品も作りますが、敢えてデザインしないけれどクリエイティブ、ミニマルで物静かな作風が、高度成長期以降の同世代に共感してもらえる点ではないかと考えています。漉いている紙は楮紙だけ。土を入れるか、そのままかだけで、傘版(39.5×49.0cm)と美濃版の二種類だけです。恐らく全国で一番シンプルな紙を漉いているのではないのでしょうか。

茶室・茶藝室池半書作品「雪」(2020年)



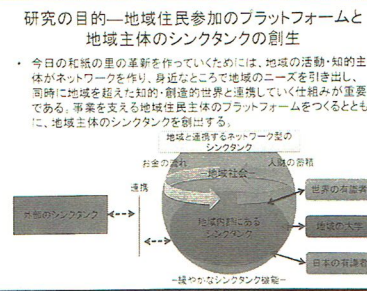
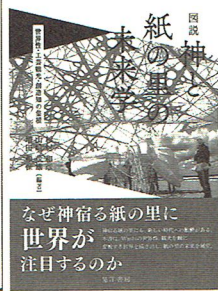
■ZOOMシンポジウム「越前和紙の里の未来を考える」開催

コロナ禍の中、昨年二月九日、「越前和紙の里の未来を考える」と題したZOOMシンポジウム(主催・福井県立大学、共催・福井県和紙工業協同組合)が開催され、約三十名の参加があった。

●三つのキーワードで方向性を探る

はじめに、杉村和彦氏(福井県立大学学術教養センター長)から、本シンポジウムのテーマ「越前和紙の未来を考える」にあたって、三つのキーワードが提示された。

氏は、一昨年出版した「図説神



と紙の里の未来学」の調査・編集過程で、この越前和紙の里が、世界性を持った、工芸観光の中心地、創造知の集積場としての格が、十分にであることを確信。高度な和紙文化を持つ越前和紙の工芸産地が生き残り、世界に評価されるには、一・課題を共有し、地域の人たちが主体的に参画できる「内発的発展」を促す仕掛けを探り、二・技術・人材を外部からも広く求

め、持続的に育て成果を出すネットワークづくり「オープン・イノベーション」を実践し、三それらを実現していくための「プラットフォーム」(足場)の実現が必要であり、これらを手掛かりに方向性を探ってはどうかと提起した。

●基調講演

「オープン・イノベーションと伝統工芸」要旨

「オープン・イノベーションと伝統工芸」要旨

教授)の基調講演が行われた。オープン・イノベーションは、研究・製品・技術開発や組織変革などを自前主義から脱却を回り、広く自社以外の組織や機関などのノウハウや技術を取り込み、創造的発明・発見の速度を早めようという概念である。従来、日本の閉鎖的企業風土では難しいと言われてきたが、多品種少量生産、製品開発速度の迅速化、国際競争激化などの厳しい環境下で、日本でも戦略的に取り組む所が増えてきた。ただし、このシステムの真価は、構成員の自由闊達な議論と相互の人格の尊重、発案者の知的所有権の保証、学び・育ち合うという公正なモラルがあつてこそ発揮される。

・内発的に学び合い・育ち合う風土

工芸の世界でも、この概念を取り入れることにより、創意・工夫・発展が期待できる。日本製品は最先端技術では米国に先を越されているが、工芸や職人仕事の面では、圧倒的に強いと言われる。手間を惜しむことなく、長い年月創意工夫しながら生み出されてきたものは、簡単には真似ができない。工芸産地が全国の



池上惇氏

あちこちにあり、数も多い。それら多くの地域の工芸風土を支える底流にある習慣や行動の特徴は、宮本常一、鶴見和子などの民俗学者たちが指摘している。例えば、かつての集落の寄り合いでは、皆が意見を出しながら、熱心に耳を傾け、学びあい、満場一致するまで議論する粘り強さがあつたことや、霊の存在を共有し、自然を敬い、神の前では嘘をつかず、互いが誠意を持って尊重し合う態度などが、この村にもあつたと観察されている。

この態度は、職人文化や習い事文化が、自然や神様との付き合いの中で、学び合つて育まれ、技を高め、人格までも高めるといふ、まさにオープン・イノベーションが育つ精神風土が存在することを示している。この精神風土はさらに、潜在能力を引き出す仕掛けとなり、次世代に伝える技の体験学習などにも波及していく。

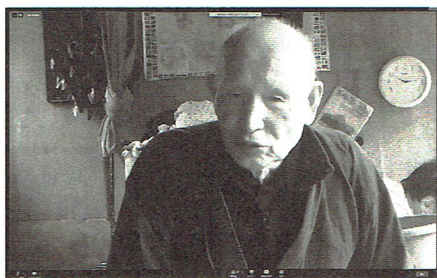
氏は、東日本大震災の復興計画にも文化行政の面から関わっているが、遠野を始め他の地域においても、まさにこの「学び合い・育ち合い」の活動の中から、驚くような新しいアイデアやビジネスが湧き出てきて、実際に発展した事例を幾度となく目撃している。ここ今立にも紙の神様を祀る岡太神社・大瀧神社があり、祭りの話合いや地元有志の研究会や勉強会、体験学習会などがしよつちゅう行われている。当地の「女紙倶楽部」や「越前和紙青年部」の活動も良い事例だと言える。



岡太神社・大瀧神社

・国際的つながりと開かれた学びの場

伝統工芸が国内だけでなく、世界市場で高い評価を受け、世界に通用するものづくりを行なっていくには、その工芸の歴史・知恵・技術を交流・蓄積・発展させていく研究母体やシンクタンクが必要である。多品種少量生産の時代には、海外のトップ・クオリティ・ユーザー（非常に品質の高いものを好む人たち）が全体の需要を牽引するが、彼らは工芸に対する深い理解、学習、研究などにも大いに興味を持つ知的な人々たちである。



岩野市兵衛さん始め、越前の和紙工場の英語字幕付き紹介ビデオを配信予定

例えば、人間国宝、岩野市兵衛さんの和紙は、オーガニックなアートとして昨今米国でも人気の高い「木版画」の世界で、憧れの紙であると聞く。世界の人が認める「美しく、品格があり、個性的な工芸のトップ・クオリティ」を普遍化していくためには、世界のトップ・クオリティ・ユーザー・アーティストだけでなく、海外の美術大学の学生や研究者が産地と交流して学べる教育・研究の場やプログラムが必要であり、更にそこで高度な学位が取得できれば、産地全体の「格」が高くなる。

又、研究教育の場は地元の知識人養成にも一役買う。日本には昔から各地に民間の塾が多くあり、学者と一般人の壁があまりない。学者以上に知見を持っている地元研究者が大勢いる。文字化する習慣があれば、知識が蓄積さ

れやすく、継承の面でも次世代に繋げやすい。通信教育や学位授与という体制を作っておくと、職人にもプラスで、産地の「格」も上がるだろう。

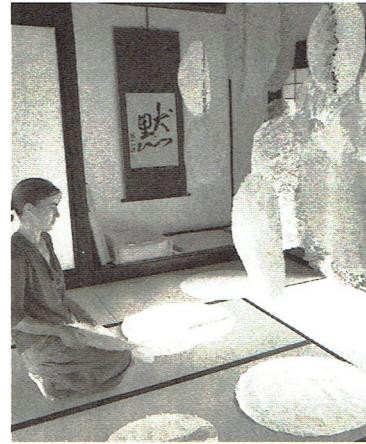
大学や海外と連携し、例えば「和紙製造・デザイン・地域づくり研究教育学会」「今立和紙文化学会」「越前和紙国際文化研究所」「アーティスト・イン・レジデンス」などを構想してみるのが良いだろう。

基調講演の後、石川浩氏（福井県和紙工業協同組合理事長）が、一昨年から取り組んでいる「産地振興計画案」と進行状況を紹介。（詳細は本号で紹介）

増田頼保氏（今立現代美術紙展」実行委員長）は、この展覧会創始の契機となったアーティスト河合勇の足跡と展の歩み、最近の活動をビデオで紹介。今立現代美術紙展が国内外の様々な人を巻き込み、今立のファンづくりの一助になれば、と述べた。

続いて、二〇二二年、越前和紙の漉き場や販売に関わる女性たちが、和紙の里の情報発信や商品開発をしようと結成された「女紙倶楽部」代表の石川靖代さんが、活動と成果を紹介。質疑応答、若干の討議の後、シンポジウムは終了した。

Aidé Bernardさんの作品展示風景（越前市卯立の工芸館）



取組紹介

■越前和紙ブランディング戦略策定 Bespoke Washi Echizen への挑戦

二五〇〇年の歴史を持つ越前和紙産地は、全国唯一の紙の神様、紙祖神を祀る岡太神社・大瀧神社を有し、手漉き和紙生産量全国二五％を誇る、日本和紙三大産地の一つである。個性豊かな和紙を作る漉き場が多く点在し、近年「工芸観光」で訪れる人も多い。又、技法や歴史資料の蓄積も多く、展示会やシンポジウムでも存在感を示し、国内外の和紙ファンを惹きつけている。

しかし、ピークの平成三年には九五億円（組合員数：九〇事業所）あった出荷量も、平成三〇年には二八億円（組合員数：五八事業所）と減少。危機感を持つ福井県和紙工業協同組合は、「中小企業活路開拓調査・実現化事業」の助成制度を活用し、平成三〇年度「越前和紙産地振興プロジェクト」を立ち上げ、このほど二〇二二年度までの振興計画を策定した。

●最優先課題ーブランディング

コンサル会社の助けを借り、まず、和紙事業者、ユーザー、問屋、和紙卸商などから、問題点をヒアリング。それを元に、当プロジェクトの和紙組合コアメンバーは、乗り越えるべき課題を明確化していった。

プロジェクト世話役の石川浩さん（福井県和紙工業協同組合理事長）は、越前和紙はいろいろな紙が漉けると言うが、では具体的にどんな紙なのかイメージが曖昧。各メーカーのポテンシャルは高いが、それを発信するプレゼンテーションツールが少ない。越前和紙全体を東

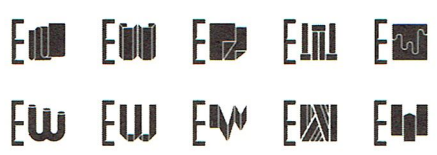
ねてプロデュースする人材がいらない、などの問題点を挙げ、「要は、越前和紙にしる、この和紙の里にしる、皆さんの頭の中にパッとイメージできるものがなく、実力の割にかなり認知度が低い。越前を訪れたことない方は、田舎に二軒だけあるような和紙産地をイメージするの、紙漉き場がこんなにある一大産地だったのかと、来てみるとビックリなさるのです。平たく言うと、私たちは、越前和紙？あつ、あれか！あそこね！とすぐに思い浮かべてもらえるようなブランドの確立をまず、目指さなければならぬ」という結論に至りました」と、最優先課題を語る。

●あなただけの「誂え和紙-Bespoke Washi Echizen」

ブランディングの要であるブランドコンセプトとロゴは、世界に向けた情報発信も意識して、従来の漢字表記からアルファベットに変更。ロゴマークのEWのEは、越前Eで、和紙づくりに欠かせない道具「實桁」を表し、Wの文字は、實桁のEから客の要望に応えた様々な紙が生まれてくる事を表しています。「誂え」を意味する英語の「Bespoke」(ビスポーク)と言う語を用い、つまりあなただけの「誂え和紙-Bespoke Washi」を作る産地「越前-Echizen」だと訴える。



Logo mark



Logo Application

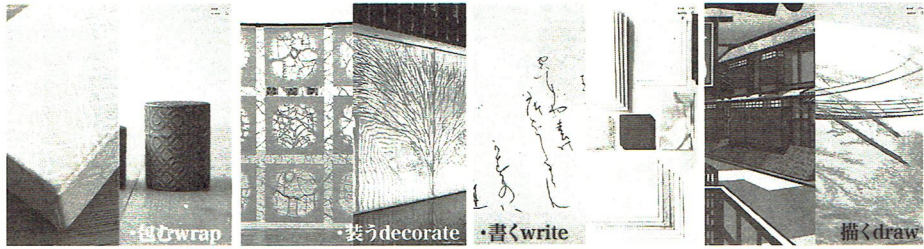
日英の二カ国語で開設したポータルサイト

(echizen-washi.com)は、産地の歴史や伝統を説明するだけでなく、エリアマップもあり、和紙を使いたい人の立場に立った検索が可能な構造になっている。

例えば、「用途から選ぶ」というページは、

- ・描くdraw
- ・書くwrite
- ・書包むwrap
- ・印刷するprint
- ・貼るcover
- ・装うdecorate
- ・その他 ∞

に分かれ、様々な条件で検索すると、最終的に「オスメの漉き場」を紹介してくれる。「越前和紙の作り手たち」ページでは、各々の漉き場の歴史、得意技術、象徴的作品、連絡先などが紹介されており、現在のところ、和紙組合に加入している四八社と和紙問屋および紙加工会社九社が掲載されている。

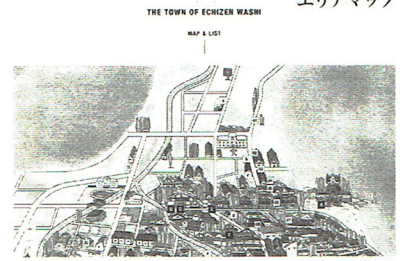


●場づくりとチームワーク

プロジェクトでは七つの新アクションプランが設定されているが、様々な人を招き入れ、巻き込み、連携していける場づくりは、重要であると石川さんは言う。

「ここ数年、工芸観光の流れも定着してきまし

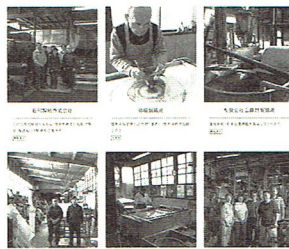
エリアマップ



たし、組合ではシンポジウムや展示会を開催しています。ここに世界中から紙の研究者、ユーザー、アーティストを招き入れ、越前和紙のファンを拡大し、論文も発表できる場を作り、肌

で越前の魅力を知っていた。去年来訪したオランダのアーティストは、紙を造形するとか絵を描くのかと思つたら、紙を揺らして音を奏でる作家でした。

新しい紙の使い方や紙の発見、使い道を考える人の発掘にもなります。



マーケティング・プレゼンテーション能力の高度化、テクニカルアークイブ集や展示会ツールの作成、ビジネスマッチングの受け入れ体制の整備、深刻な原材料問題など、やっていかなければならない課題は山ほどある。

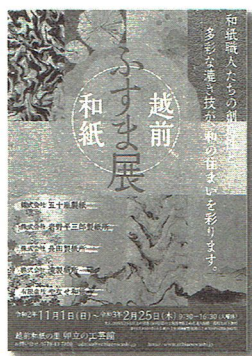
コアメンバーの一人、山路勝海さん(山路製紙所)は、「越前和紙に関わる人々それぞれが個性を生かして、和紙にかける情熱と愛を原動力に最高を追求する動きが、自然発生的にチームワークに現れるのだと思います。このチームワークこそが越前の強みであり、ブランドと産地振興の礎になる」と語った。

情報欄

●イベント情報

■ふすま展

時：令和2年11月1日(日)～令和3年2月25日(木)
場所：卯立の工芸館(越前市新在家)2F ギャラリー
入場料：大人200円、高校生以下：無料



■JAPAN SHOP 2021

時：令和3年3月9日(火)～12日(金)
場所：東京ビックサイト 西館

編集後記 ●ハタノワタルさんは、和紙で食える紙漉き・作家のパイオニア。マーケティング的なことは一切やらないといった制作態度に、ポストコロナの時代の潮目を見る気がしました。(よ)

●越前和紙のポータルサイト

今号でもご紹介した越前和紙振興計画に基づいて作成した越前和紙の新しいポータルサイトは、ユーザー目線で検索しやすい内容、越前和紙の里のご紹介、漉き場や加工場紹介、作品などもご覧になれます。特注オーダー、印刷など、あらゆる用途に向けた専門性の高い商品を眺める「Bespoke Washi」を発信しています。どうぞご覧ください。
Website: <https://echizen-washi.com/>



越前和紙 ホームページ

「和紙だより」は今号で最後

17年間発行を続けてまいりました紙媒体の「和紙だより」は今号が最後になります。2004年に発行を始めました時、情報を発信する所には、情報も集り、ネットワークが広がればビジネスチャンスも広がるのでは?という裏の目論見もありました。産地の方々や関係者が、自ら考え、行動できるヒントを少しでも提供できたら...という願いの元、当初からの編集方針は、1.越前だけにこだわらず、広く全国の和紙の職人さんからエンドユーザーまでを射程に置く記事作り、2.学術の記事から、ビジネス関連、新しい挑戦など、硬軟取り混ぜた記事作り、3.外国人インタビューを心がけ、世界に和紙を発信・交流する、でした。皆様、長年のご愛読ありがとうございました。

尚、facebook「越前和紙だより」は、継続いたしますので、是非「いいね!」をお願いします。

今まで発行されました「和紙だより」は、(<https://washidayori-jimdofree.com>)からバックナンバーがダウンロードできます。

また、今まで発行されました「和紙だより」は、来年度中に集冊版冊子を発行予定です。ご予約・お申込みは、福井県和紙工業協同組合までどうぞ。

「和紙だより」編集長 右衛門佐美佐子 取材協力・デザイン 田中裕子



facebook



バックナンバーのダウンロード